

**YouTube**  
公害資料館ネットワークチャンネル  
開設しました

2020年度に開催したオンラインイベントや研究会、2019年度に船木成記さんのご協力を得て撮影した「公害資料館ネットワークのこれまでとこれから」を視聴いただけます。コンテンツの数はまだ少ないですが、これから増やしていく予定です。

一部はネットワーク会員限定となっておりますので、限定映像はメーリングリストからのご案内にそってご覧ください。また、コンテンツの作成に協力いただける方も募集中です。



<https://www.youtube.com/channel/UCOmbwU2IYuFM7kPZy8zwp1Q>

電子書籍始めました

過去に開催した公害資料館連携フォーラムの報告書から、基調講演や分科会の報告をPDF化して公開しています。

現在は、試行的に無料配布していますので、ぜひ授業や勉強会など学びに活用してください。

順次、作成・公開していますが「これを電子書籍化してほしい」などご要望などありましたらお寄せください（関係者の意向等により作成できない場合もありますので、その点はご了承ください）。



公害の学びの入門書

『公害からの問いかけ(仮)』の作成について

本書は、日本環境教育学会のなかに置かれた公害教育研究プロジェクト(2016-19)の成果物として構想されました。いまなぜ「公害に学ぶ」ことが大切なのか。私たちは、それを大きく2つの視点で捉えています。

ひとつは、公害という「困難な歴史」に学ぶことを通して、私たちは、公害のない、環境/社会的に公正で民主主義的な社会を築く市民になることができると考えるからです。

もうひとつは、公害という「困難な歴史」を学ぶことを通して、私たちは他ならぬ自分自身と向き合い「どのような人として生きていきたいのか」を再定義する機会、たとえどんな人生の段階にあっても得ることができるからです。

1点目は公害教育/公害学習の社会的・環境的な意義であり、2点目はその人間的な意義である、と理解することもできるでしょう。「公害」という言葉が現代社会を読み解くキーワードとしての位置を追い出されてから長い時間が経過しています。それゆえ、この言葉にあらためて光をあてる学びをつくりだしていくことは、学習者にとって世界と自分自身とを問い返す場へと誘われる経験を意味することになるのだと考えます。

本書は2021年夏に「ころから」出版社から出版予定です。編集者やデザイナーさんの意見を取り入れ、図版の多い、高校生でも分かりやすい本をめざしています。公害をいろいろな側面から捉えられるように、様々な立場から公害に関わっている人に執筆を依頼しているところです。将来的には電子書籍化することも視野に入れています。出版にあたって、クラウドファンディングを行う予定となっております。また広くご協力をお願いすることになると思います。どうぞよろしく願いいたします。



公害資料館

ネットワーク

だより



2020年度

新型コロナウイルス感染症拡大状況下での  
公害資料館ネットワークの取り組み



- ・ホームページをリニューアルしました
- ・オンラインで研究会や交流会を開催しました(企業/教育/資料・交流会)
- ・ナガサキピースミュージアムでの展示とトークイベント開催
- ・YouTubeチャンネル開設しました
- ・電子書籍始めました
- ・公害の学びの入門書を作成中





## ニュースレター発行にあたって

新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた1年。  
 そのなかでも公害資料館ネットワークでは  
 オンラインでのつどい開催や動画・電子書籍の作成に着手しました。  
 3つの研究会や長崎でのトークイベントなど、  
 この1年のネットワークの動きをニュースレターでお届けします。

## 活動が評価されました

地球環境基金レポート2019に公害資料館ネットワーク  
 が「ベストプラクティス事例」として掲載されました。  
 これは地球環境基金が助成先に対して実施したフォロー  
 アップ調査の結果から、活動の自立性や継続性の観点でと  
 くすぐれた活動として抽出されたものです。  
 ネットワークとして培ってきた学びの場としての活動が  
 評価されました。



## ホームページをリニューアルしました

### ネットワークに参加する皆さまの情報をもとに公害の今を発信する



#### ▶ 学びの入り口に

公害について関心を持つ方にとって、学びの入り口になりたい。そんな想いから  
 ネットワークに参加する資料館とのつなぎ役であり、公害に関する多くの情報が  
 集積する場へと、ウェブサイトを更新しました。  
 また、そうしたネットワークを表現するため「公害の経験から得た知恵を、持続  
 可能な社会の実現のために」というフレーズをトップページに掲載しました。

#### ▶ 新たな情報も追加

2016年にホームページを開設して以来、活動の深まりに合わせて多くの情報  
 が蓄積されてきました。そこで、これまでのフォーラムや研究会の情報を整理し  
 たり、スマホにも対応しました。  
 また、新しくオープンした資料館にもお声をかけし、仲間が増えています。動画  
 や電子書籍も掲載されていますので、ぜひ一度ご覧ください。

ホームページ <https://kougai.info/>



## オンラインで研究会や 交流会を開催しました

Zoom を駆使して、「企業」「教育」「資料」の研究会や「公害資料館交流会」を開催しました。  
 オンラインで開催したことで、遠隔地からも参加できる利点がありました。  
 議論した内容について報告します。

## 五十嵐 実さんに聞く 「公害問題から学ぶ対話の場づくり」

### 企業研究会

- ◆日 時：2020年8月19日(水) 15:00-17:00
- ◆参加者：12名
- ◆ゲスト：五十嵐 実さん(日本自然環境専門学校校長、一般社団法人あのがわ環境学舎共同代表)

オンラインでの開催とあって、全国各地からつないでの研  
 究会。初の試みですが、ビデオ上ではありますが、“顔の見える”  
 交流となりました。

当日は、五十嵐 実さんから『SDGs時代のパートナーシッ  
 プ』(※)に収録された論文「問題解決の推進力を強化する場づ  
 くり」の内容を中心に、対立を乗り越える対話の場づくりにつ  
 いて40分レクチャーいただきました。

自然環境専門学校での教育活動や、阿賀野川流域で新潟水  
 俣病のまやい直し事業に関わっていた五十嵐さんが、お隣の  
 富山はどうされているのか? 知りたい! と参加した2009年の  
 『公害の今を伝えるスタディツアー』でイタイイタイ病の  
 問題解決のしかたに感銘を受けて公害資料館ネットワーク  
 に関わるようになったこと、2014年富山で開催した際に、  
 『緊張感ある信頼関係』の関係者がそろってのシンポジウム  
 ができたことをお話しされました。

#### ▶ 質疑 & グループディスカッション

参加者からは同時代に新潟水俣病をどのように見ていたの  
 か、「共通の価値観を探っていく」新潟ではどのように? など  
 の質問が出ました。

その後、参加者は3グループに分かれて、感想を共有し、ゲ  
 スト講師にもう少し聞きたいことなどのキャッチボールを  
 しました。中でも、対話の場である「ロバダン」の400回開催  
 (!)への関心が集まりました。

意見の違いがあっても「そう考えられているんですね」と

いったん受け止めることや、学習、  
 共通体験の中で、こちらは事実を伝  
 える。皆が同じものを食べたり同じ  
 ことを考えたりするなかで考える  
 しかない、生活の話を聞くという言  
 葉が印象的でした。

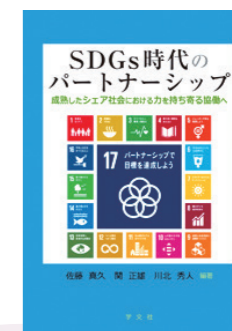


ちなみに・・・五十嵐さんは、メンタルモデルという言葉  
 を使われましたが、ピーター・センゲの『学習する組織』で使  
 われている言葉で、対話によってメンタルモデルの違いを理  
 解したうえで、できることをしていくことが大事だそうです。

「企業のガードは固く、こえられない溝を感じることもあ  
 り、理想と現実の違いを考えさせられる」という参加者の意見  
 もありました。課題も残ります。あきらめずに人間の可能性を  
 信じてチャレンジしたいと思うという五十嵐さんの言葉が印  
 象的でした。

(報告：藤原園子)

※参考文献  
 佐藤真久・関正雄・川北秀人編著『SDGs時代のパートナーシップ：  
 成熟したシェア社会における力を持ち寄る協働へ』学文社、2020年



ISBN :  
 9784762029318

# コロナ禍の中での公害の学び

## ～「現地に行って学ぶこと」の困難にどう向き合うか～

### 公害教育研究会

- ◆日時：2020年8月23日(日) 14:00-16:00 ◆参加者：55名
- ◆登壇者(登壇順)：
- ・葛西 伸夫さん(水俣病センター相思社)
  - ・藤原 園子さん(みずしま財団)
  - ・平野 泉さん(立教大学共生社会研究センター)
  - ・小川 輝光さん(神奈川県立相模原高等学校)
  - ・丹野 春香さん(東京医科歯科大学特任研究員)
  - ・川尻 剛士さん(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)
  - 司会 古里貴士さん(東海大学)

2020年は新型コロナウイルスの感染拡大が社会問題となり、公害の学びが大切にしてきた「現地に行って学ぶこと」が困難となり、オンラインでの学びに切り替えざるを得なくなりました。そこで、コロナ禍の中で公害資料館がどのような対策をとってきたのかを情報共有しながら、公害教育に関わり、そして、関心を持つ人たちから公害教育の魅力について語り合う時間を持つことにしました。

#### ▶ 事例報告

##### <相思社の取り組み> 葛西 伸夫さん

コロナウイルスの影響が出始めた頃に、不備があった相思社のOPACのシステムが回復して、資料検索が可能となり、資料のコピー提供ができるようになった。また忙しい時にはできない資料整理などができてよかったと報告がありました。

また、埼玉大学の安藤聡彦先生のゼミとコラボして、「オンライン合宿」を開催したことの紹介がありました。27人と生中継でつなぎながら水俣の街案内を行ったそうです。オンライン配信は合理的で、言いたいことが言えるが、ノイズや匂いなどは伝わらず、代替物にはならないのではないかとのことでした。

##### <みずしま財団の取り組み> 藤原 園子さん

みずしま財団もコロナウイルスの影響で、予定されていたフィールドワークの受け入れが中止になってしまいましたが、こういう時だからこそ調査はできるのではないかと立ち、高梁川流域川ごみ調査(倉敷市委託事業)、漂着ごみ調査(岡山県委託事業)などに取り組み、また動画を作成し、高校生に学びを届ける高梁川流域地域づくり連携推進事業「地域からの発信！高校生と生物多様性をつなげるプロジェクト」(倉敷市事業採択)として動き出したとのことでした。

2019年に公害資料館ネットワークと一緒に公害資料館連携フォーラムを倉敷で開催しましたが、それらの報告書とともに、水島の公害を学ぶことを医療機関などに働きかけたこと、水島の公害の学びが岡山県観光連盟教育旅行パンフレット掲載されていることから秋からの研修の問い合わせが来



ており、その対応をするなど、コロナの時期を準備の時間と捉えてこれからの対策を考えた様子について報告されました。

##### <立教大学共生社会研究センターの取り組み> 平野 泉さん

共生社会研究センターは公害だけにとどまらない多様な市民の社会運動の資料が保存活用されており、「公害」という現地を持っていないアーカイブズということになります。コロナウイルスの緊急事態宣言で閉館となり、スタッフ全員が在宅勤務となり、オンライン発信やオンライン利用受付などをしてきましたが、主たる利用者である学生や研究者が忙しすぎてあまり反応はなかったとのこと。

今回は改めて「アーカイブズとは何か」を考え、「アーカイブズを学びに生かすとは」について問う発表をしていただきました。

アーカイブズとは「個人や組織が、日々、仕事の必要に応じて作成したり、受け取ったり、ファイルしたりする文書や記録の総体」と説明があり、そのアーカイブズを利用して研究だけでなく、教育に役立ちたいとのことから、A.「アーカイブズ」って



葛西 伸夫さん 藤原 園子さん 平野 泉さん 小川 輝光さん 丹野 春香さん 川尻 剛士さん

何だろう？ B.資料を読む C.グループでわかったことを全体で共有と3段階の工程をもとに教育を行なっている点や、その授業の中で「市民活動のアーカイブは、人を死なさないと感じた。」(2019-01-08 宇井純資料を使ったクラスに対して)との学生のコメントも紹介されました。

アーカイブズを学ぶとは、「頭で理解する and/or 感情で受け止める」大切さ、「今、ここにはいない誰か」とともに学ぶことを可能にするアーカイブズ資料 = どこでもドア」である可能性を秘めていることを報告されました。

#### ▶ 利用者の声として3者から報告がありました。

##### <利用者側から>

高校の教員である小川さんからは、コロナウイルスの影響で毎年行っていた水俣でのフィールドワークができなくなったこと。この水俣のフィールドワークでは「人間の尊厳」や「豊かさの本当の意味を考える」ことを大切にしており、人との出会いから学びを作ってきたが、コロナウイルスのせいで人と人が会えないことでの困難であるが、これを機に、これまでとは違う各地とつなぐこともできるのではないかと模索していきたいとの希望が語られました。

大学生の時から水俣について学び、現在は大学での教育の中でその経験を生かしている丹野さんからは、水俣での学びは「一人で出会っていたらやめていた」かもしれないと語りました。

また、共に学んだ仲間がいたことが現在につながっていると言います。利用者側として「映像」が欲しい、オンラインでは「からだ」を感じながら共に学ぶことが難しいことが述べられました。

現在大学院生の川尻さんからは、「私が公害問題に関心を持つようになったきっかけは、公害問題の中を生きてきた人び

と——水俣病患者をはじめとして、患者に寄り添って生きてきた方たち——の『苦悩(suffering)の創造性』とでもいうべきものに惹きつけられたことだと思う」との話から、本気で語る先輩たちの言葉に「自分の言葉」をもっていることに引き付けられたことの紹介。また現地に行けない困難の中で、相思社の「ごんずい」の中の資料紹介に助けられたこと、オンラインで逆に出会いが増える可能性などが述べられました。

#### ▶ 討論内容

参加者からは、公害問題を闘ってきた先人から「次の世代に引き継いで欲しい」と言われたバトンが若い世代に引き継がれていることを実感して元気が出たこと、「学びを止めてはいけない」ということや、「昔に戻れない」とコロナ前には戻れないことを受け止めて、どのようなことに取り組んでいくかを皆が考えようとの意見が述べられました。

公害資料館を利用する立場(大学教員)からは、学生が自分で見に行く・調べる資料の方が感動することから、できるだけオンライン上で読める資料が多くあって欲しいとの要望が出されました。

海外からの公害教育の需要のある北九州の参加者からは、多言語発信について発言があり、情報交換が行われました。

藤原さんから「私は公害を知らない世代への「中継ぎ」をしている」との発言があり「共に学ぶこと」の意義に、資料が仲介役になるのではないかと発言があり、平野さんが呼応するように「過去の資料を使って過去を想起する」ことのサポートを資料館がすることになると述べられました。

最後に、司会の古里さんから「公害教育は幾層に分かれていて、自身を問い直す学び」になることとコメントがあり、研究会が閉会しました。

#### ▶ 参加者からの感想(一部紹介)

オンラインだからできる／やりやすいこと、と現地だからこそ得られるもの(ノイズ、五感など)があるという整理ができたのはよかったです。オンラインを使うことで、公害資料館や公害問題をより多くの人に知ってもらえる広い窓口のような役割を果たしていくのだと思います。その際、オンラインで得られるもの以上に、もっと学びたいという思いや直接学びたい(お話を聞きたい、資料を見たいなど)という学びの「余韻」(小川さんのご発言)をいかに作りだせるのが大事なのだと思います。オンラインから現地への学びに誘うための働きかけをどのようにするのが問われてるのだと感じました。

(報告：林美帆)

# コロナ禍の時代における 公害資料の有する意義について

## 資料研究会

- ◆日時：2020年10月29日(木) 14:00-16:30
- ◆参加者：12名
- ◆ゲスト：・川田 恭子さん、長谷川 達朗さん（法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ）  
・蜂谷 紀之さん（元国立水俣病総合研究センター）

新型コロナウイルス感染症と公害問題は質が異なりますが、公害資料を整理・閲覧していると現在のコロナ禍をめぐる様々な現象と共通する側面があることに気付かされます（差別や隔離の問題、被害の軽視あるいは無視、産業優先との関係、医療の問題、補償の問題等）。

コロナ禍の時代、公害資料から何を学ぶことができるのか、人々はこれまで個別の現象にどう対処し解決していったのか等、公害資料はわたしたちに様々な示唆を与えてくれる可能性があります。

研究会ではまず現在の様々な現象に通底するような資料をご紹介いただき、その後のグループディスカッションにて、会員各館所蔵資料や利用者の立場等から、コロナ禍における公害資料の保存や活用の意義を考えてみました。

### ▶ 報告

#### 1 環境アーカイブズ所蔵薬害資料（川田・長谷川）

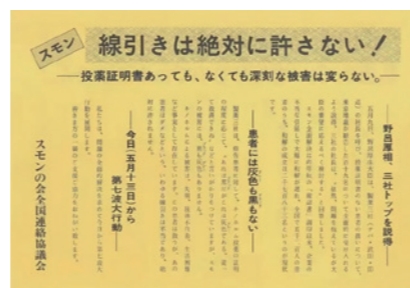
「もしコロナのワクチンで薬害が起きたら？」をテーマに、薬害スモン被害者の全国組織「スモンの会全国連絡協議会」寄贈の「薬害スモン関係資料」からビラ2点、サリドマイド被害の支援者でありジャーナリストである川俣修壽氏寄贈「サリドマイド事件関係資料」から薬害被害者の声を記した手記が1点紹介されました。

薬害スモン（SMON、1955年頃～1970年発生）では、胃腸薬キノホルム剤による被害を受けた人が診断書だけでは「被害者」として認められず、救済対象にならないという問題が生じました。認定には「投薬証明書」という、医師によるなにをどのくらいの期間投薬したかを証明する紙が必要でした。紹介資料中には「線引きは絶対に許さない！—投薬証明書あっても、なくても深刻な被害は変わらない。」や、認定作業の遅れのために救済が保留された数千人の水俣病患者に言及した「水俣病の誤りをくり返すな」というメッセージがあります。今後、新型コロナウイルス感染症ワクチンで薬害が起きないとも限りません。証拠としての記録を取っておくこと、薬を認可する国の責任を明確にすること、薬害を繰り返さない救済システムの構築が肝要です。

サリドマイド事件では、つわり止めとしても使われたサリ

ドマイド含有薬剤が1958年に販売開始、1962年薬品回収が行われたものの不徹底だったため1969年まで被害発生、1974年に和解が成立しました。「被害者」として認定され補償を受けることは重要です。

しかしながら、直接的に被害を受けた胎児が、後遺症や障害と向き合いながら、ときに地域社会の「他者」として一生を生きていかねばならないことには変わりはありません。報告では薬害被害者の「その後」に着目し、その手記が紹介されました。「私は十五歳の時、サリドマイド被害者と認定されて、間もなく複雑な心境に陥った。今まで奇形児として、差別、偏見を受けて生きてきた十五年と被害児として生きるこれからの、何の違いがあるのかと考えた。一度被害が生じてしまったら、たとえ社会的には解決できたとしても、心と身体を癒すことがとても難しいと痛感しました。



川田 恭子さん



長谷川 達朗さん



蜂谷 紀之さん



進行: 清水 善仁さん

#### 2 資料で考える水俣病（蜂谷）

水俣病の事件史に関連する患者の映像、認定件数・申請者数グラフ、自治日報、水俣時事新報等の資料が紹介されました。1968年、水俣病は公害病として認定されます。

1970年前後の水俣は、訴訟により補償を求める訴訟派、補償問題処理を国に委ねる一任派、加害企業チッソとの直接的対話を目指す自主交渉派、そしてチッソの経済的・社会的恩恵を訴え患者の行いを批判する市民らが隣近所に住むという、一つの地域社会が分断された苦しい状況にありました。

資料からは、大多数の生活のためには住民のほんの一部に関わる公害の事実を隠し、被害が生じても仕方ない、というのちを序列化するような官僚側の見解（自治日報）や、自主交渉派を「水俣市を暗くしている十七人」とする表現（水俣時事新報）が見られました。

エビデンスに基づく医療・医学・政策立案が重要であると同時に、患者や市民への差別をはじめとする公害もたらした経済的・社会的影響にも目を向ける必要があります。

#### ▶ グループ別ディスカッション

- ・新型コロナウイルス感染症について、行政機関などで市民の声を残しておくことが大切。SNSも記録の蓄積になる。
- ・コロナ禍の問題と公害の展開過程がよく似ている。どのような政策や責任が取られたか、隠蔽のための論点ずらしはないか、その記録や資料をどう残すのかが重要。その都度の記録を通して問題を考えることができる。
- ・長期化するかもしれない、公文書やカルテの保存期間を超えるかもしれない。
- ・実態を十分に把握できておらず、公表されていない事実がある段階で議論が行われている点も共通。
- ・各資料館で教訓を伝えることも大切だが、自館の資料にも調査できていない課題や隠れた資料があるかもしれない。学会などと連携し、新たな現状から見えるそれらの課題を発信していく必要がある。
- ・水俣の問題に関連し、個人や家族の生活を守るために市民間で攻撃性が出た点は共通。また、地方が軽視/差別された公害問題に対し、コロナ禍では都市部が差別されている新しさ。
- ・資料を提示するとき、国と被害者の二項対立だけを見せると、自分たちの加害性への想像力をとぎやしてしまう。市民間でも問題は起きており、差別する側にもされる側にもなる可能性がある。
- ・被害者の中での分断が広がっている。給付金や「夜の街」など、政府の政策による部分もあるが、市民が自分の感度を上げて過去の営みから学び、分断への対処を考えることが大切。

#### ▶ まとめ

場所を越えたオンラインにて、資料画像を皆で共有し、いろいろと議論することができました。

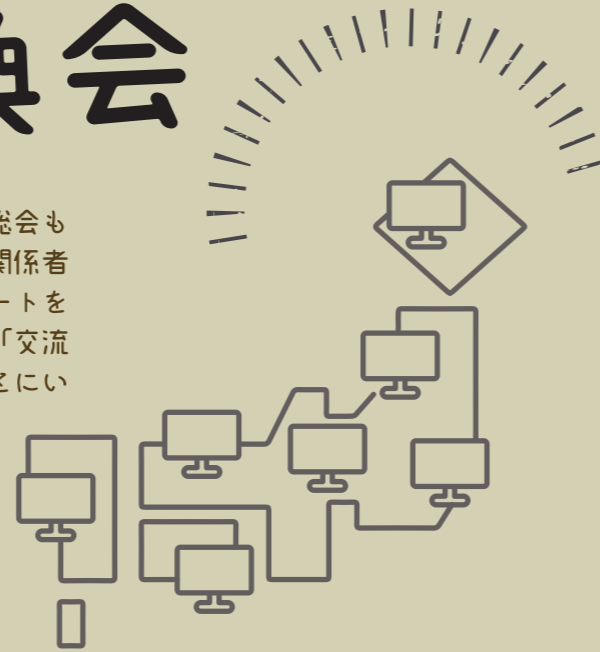
過去(&現在進行形)の公害資料からコロナ禍の時代に対するヒントを得ると同時に、現在生じている問題から各館の資料を見直していくことができそうです。

(報告：香室結美)

# 公害資料館ネットワーク 意見交換会

新型コロナウイルスの蔓延によって、公害資料館ネットワークの総会もオンラインで開催することとなりました。総会開催前に、公害資料関係者及び会員の皆さんにコロナ禍でどのようなことを行いたいアンケートを行いました。様々な意見をいただきましたが、多く寄せられたのは「交流したい」という意見でした。そこで、総会後に意見交換会を持つことにいたしました。ここではどのような意見が出たかをご紹介します。

- ◆日時：2020年6月28日(日) 14:10-15:10
- ◆会場：オンライン会議システムによる開催
- ◆全体進行：西村 仁志さん ◆参加人数：26名



## グループ報告

### グループ1

Zoomのブレイクアウトルームの機能を利用して、3~4人のグループに分かれ、20分程度意見交換を行いました。その後、グループでどのようなことが話されたか、全員で共有しました。

- ・四日市公害と環境未来館は来館する学校等が少なくなっているが開館はしている。2015年にフォーラムを開催した後にアセアン諸国やインド等の見学が増えており、通訳など人員を強化してきて、海外への発信に対応できている。
- ・発信していく観点が環境技術だけにならないよう、健康被害を置き去りにしないようにしなければならないという指摘もあった。
- ・水島や四日市は大気汚染公害ということもあり、新型コロナウイルス感染症に関連して呼吸器に関する発信をしているのかという問いもあった。
- ・四日市では、患者さんの疾病の特性(夜に症状がひどくなる)などを丁寧に説明するようにしている。
- ・新型コロナウイルスによる生活が抑制されている中で、倉敷では患者さんを見てると仲間がいることの強さを感じる。またハンセン病の関係の方が、新型コロナウイルスにかかった患者さんを差別する社会の風潮を批判する意見を発信されていて、地元新聞記事ではよく目にするといったことを共有した。

### グループ2

- ・ピンチをチャンスに、オンラインでの研究会に参加できる場があるならばオブザーバー参加歓迎として、こまめに開催を呼び掛けることができれば、より幅広い参加、お互いの刺激になるのではないか。皆さんが集まりやすいのはいつだろうか。
- ・報告書の販売のチャンネルをどうするのか。例えば大学図書館にいれるといった、なにかしらのヒントがあれば広げることができるのではないか、報告書を広げる、販売することをがんばりましょう。
- ・3つの研究会が動いているが、そもそもネットワークを強化するのか、研究にシフトしているのか、共有する必要があるのではないか。

### グループ3

- ・水俣市立水俣病資料館はすでに再開しているが、団体の来館者が減っている。
- ・法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズは、郵送での資料の複写サービスを検討している。
- ・ふたすけ(ふたば地域サポートセンター)では、富岡町で来年3月に考証館の開館をめざしている。伝承だけでなく人々がどう闘い何をなしてきたか残せるものをつくらうと思っている。
- ・映画「MINAMATA」、日本では新型コロナの影響で公開が延期されている。まだ見てないが、興味半分と不安半分といった話をした。
- ・水俣の3者(相思社、国水研、市資料館)が連携したデータベースが準備されていることについて得意分野が違う館が連携しているのは利用者としてもとてもありがたい。福島でもそういった連携ができるといいといった話になった。

### グループ4

- ・来年のフォーラムに関してアイデアが欲しいということから、原爆に関わる平和教育の話やそうした運動とのジョイントができる、福島にもつながるのではといった話がでた。
- ・水俣市に隣接する津奈木町立つなぎ美術館では、現代美術家の柳幸典やユージン・スミス展など野心的な企画を準備中であるが、水俣市では市長が代わった影響か、公害や水俣病に関する企画に後ろ向きである状況を共有。
- ・つぶやきなど共有するなかで、新しいことを発見し広がっていくので、こういう場を活用しましょう。

### グループ5

- ・オンラインでどんなことができるのかという話をした。全国、海外からでも参加できるのはよい点。
- ・日本環境教育学会が、野外活動の補完としてどのようなことができるのかアンケートをとっている。
- ・一方、注意することとして、ビデオのオン・オフなど気を遣うことや、著作権への配慮、改正著作権法第35条などについて話題がでた。
- ・「記録で見る大気汚染と裁判」のウェブサイト、個人情報保護の観点でWEBでの資料公開の再検討の対応が求められている。
- ・オンラインは便利な点と反面、注意することがあるので、そういったことを踏まえネットワークの活動もやっていきたい。

### グループ6

- ・福島で原発と向き合う難しさ。例えば原発事故を題材とした演劇をするのもクラブ活動ではやりにくい。双葉町に国立の資料館が開館するがどのような視点なのかわからない。
- ・大学の看護学科では、予防の観点で公害を伝えている。
- ・大学の自由さと高校の自由の少なさの違いについて意見を交わした。
- ・公害だけでなく、地域の人が地域について学んでいるかという難しい。現地で現地を学ぶというハードルは高いことを共有した。

### グループ7

- ・移動が伴わないため、国際会議への参加のハードルが下がっている。今回もオンラインだから参加できた。
- ・ネットワークのメンバーがコアになって、アウトリーチを考えるよい機会になるのではないかな。
- ・例えば、昨年度、ICOMで発表された記録など、いろんな記録をオンラインでギャラリー化、多言語化して発信していく。アウトリーチの1年。
- ・GEOCも開館できない中で、オンラインでのアウトリーチのやり方を模索している。
- ・オンライン用に作成した教材は年度を越えても利用できる(パワーポイントは1枚ごとに音声が入られるといった事例を共有)。これまでの蓄積を考えるにあたりネットワークに参加している皆さんのノウハウが生かされるのではないかな。

## その他発言

### 各地の資料館から

- ・今後ともこういった機会に参加したい。
- ・リピーターが少ないという課題があるが、水俣市立水俣病資料館などを参考にして企画展を実施し、新しい展示も増やしているので、ぜひ来館していただきたい。
- ・10名以上の団体はお断りしている。常設以外に企画展をしているが、今年はなかなかできない。状況が変われば企画展をしていきたい。

### その他、意見など

#### ◎ 平野 泉さん (立教大学共生社会研究センター)

- ・オンラインになることで言語の壁も越えられる。例えば、映像に聴覚障害の方のために字幕を付けることもできるし、重度障害などで外出できない方にもリーチできる。知恵を出して、めげずに面白いことを考えていきたい。

#### ◎ 藤原 園子さん (みずしま財団)

- ・昨年のフォーラムでも報告いただいた、岡山県立記録資料館の杉山さんから、杉山さんご自身も収集に関わるようになったので、文書を収集する段階で、公害関連に目配りして広く集めておけるよう、気をつけていきたいと言われていた。記録資料館で協力できることは何でもご相談くださいとおっしゃってくれた。
- ・四日市の資料目録をいただいたが、とてもよかった。

#### ◎ 岩松 真紀さん (立教大学・明治大学等非常勤講師)

- ・大学のオンライン授業で、イタイタイ病資料館のバーチャル展示室を見てくるという課題を出し、展示が学生に好評だった。オンラインが今後どこまで続くかわからないが、この時期にすでに用意されていて非常によかった。

### 終わりに 高田 研代表

宮崎大学の中に土呂久の資料館が開館されるという話を伺った。仲間が増えていくことはとてもうれしい。皆さんのアイデアをいただいて、来年に向けてやっていきたい。

# ナガサキピースミュージアムにて 公害資料館ネットワークの 企画展示とトークイベント開催

2020年12月、ナガサキピースミュージアムにおいて、  
「影、光る—全国公害資料館からのメッセージ」と題したパネル展と、  
【クロストーク】“ナガサキピースミュージアム × 公害資料館”が開催されました。

(主催：公害資料館連携フォーラム in 長崎実行委員会、共催：公害資料館ネットワーク)

## 【クロストーク】“ナガサキピースミュージアム × 公害資料館”

クロストークは、12月17日にナガサキピースミュージアムを会場に、大串秀人さん(ナガサキピースミュージアム)と林美帆さん(あおぞら財団、公害資料館ネットワーク)をゲストとして、友澤悠季さん(長崎大学環境科学部)の進行で行いました。現地参加9名、オンライン参加22名の計31名の参加があり、公害資料館ネットワークとしては、初めての会場とオンラインのハイブリットで開催しました。

### はじめに 友澤 悠季さん

一般に公害は「高度成長の影」とされてきました。しかし深刻な被害を経験しながらも、そこから何とか立ち上がってきた人々の歴史があります。それらを全て影と扱うのはあまりにも勿体ない。人々の取り組みの中には未来を照らす光があると感じてきたので、「影、光る」とタイトルを付けました。

長崎は、戦争による被害、原爆被害だけではなく、現在進行形のカネミ油症、また炭鉱労働や建設労働による塵肺、アスベスト労災など広い意味で公害ととらえうる被害があります。

来年、2021年に長崎にて公害資料館連携フォーラムを開催する予定ですが、そのプレイベントとして、今回クロストークとパネル展示会を企画しました。これらがきっかけとなり、平和で持続可能な社会のあり方を考える人々同士が出会う機会になればと思っています。

### トーク1 大串 秀人さん

ナガサキピースミュージアムは、NPO ナガサキピースオフィスの火運動という市民団体が建設して運営しています。長崎市街地の南部、グラバー園や大浦天主堂の登り口にあたる場所にあります。

長崎の戦争、原爆だけではなく、芸術文化、歴史、環境、国際交流などいろいろな分野の展示を中心に「未来の子どもたちに平和な地球を」をモットーに発信をおこなっていま

す。長崎出身の歌手、さだまさしの呼びかけから始まり、紆余曲折ありながら、多くの方々から募金をいただいて、完成し運営しています。

通常4週間に1回、展示替えをして、年間14、15回くらい何かしら展示を開催しています。今回の公害資料館ネットワークのパネル展示は、271回目の展示会になります。

他にも、中国の四川省の大地震を皮切りに、国内外の地震・災害時に募金を義援金として送ったり、2013年から毎年夏休みに、福島県南相馬市の小・中学生を長崎に招待して、五島列島で海水浴をしてもらったり、長崎市内の平和祈念式典に参加して平和学習するなどいろいろな活動をし



聞き手：友澤 悠季さん  
(長崎大学環境科学部准教授、  
公害資料館連携フォーラム  
in 長崎実行委員)



グラバー園から長崎港を臨む



長崎大学

### ナガサキピースミュージアム

〒850-0921 長崎県長崎市松が枝町 7-15  
〈開館時間〉午前9時30分～午後5時30分  
〈休館日〉毎週月曜日(月曜日が祝祭日の場合はその翌日)、  
年末年始(12/26～1/1)

ています。

活動の特徴としては、さだまさしというアーティストの発信力が大きく、コンサートツアーの会場に募金箱を置かせていただいたり、会員の協力が大きく関東や関西で独自のグループをつくり、ここの企画展の一部を東京や関西にもって行って開催するといったこともあります。ただ、会員さんも高齢化、会員数の減少が課題になっていますし、現在のコロナ禍の中で、さだまさしのコンサートも延期、規模・客数の縮小など、募金の方も集まりにくいといった状況があります。

ピースミュージアムは、さだまさしが発端であるように、原爆だ戦争だということに限らず、平和というのは自由に歌える、表現活動ができるということが平和ではないか、もう少し身近な平和を考えようということによってあります。企画に関しても、分野を問わず、いろいろな平和につながるようなものであれば、受け入れております。

小さな施設ですが、地域に根差した独特の展示ということで、地元の新新聞やニュースなどで取り上げられることも多いです。こうした活動を通じて、日常生活の中でふと平和のことを考える場を提供するというコンセプトでやっています。

さだまさしのつながりで、立ち上げ時から長崎放送のOB・OGが多く関わっていて、彼らと私も市職員の時から付き合いがあったので、そのつながりで退職してから携わっています。

### トーク2 林 美帆さん

公害資料館というのは、全国にいろいろあります。公立であったり、民間や大学にもあります。

私の所属する、大阪・西淀川のおおぞら財団では、2006年に資料館をつくりましたが、西淀川の公害のことだけを伝えていても、なかなか広がらないということがありました。

当時、高田研さん(おおぞら財団役員、都留文科大学教授)から、「全国の公害の『今』がわからないと、教育にはつながっていかないんじゃないか」と強く言っていただき、大学生と一緒に各地の公害地域を回るスタディツアーや、裁判の資料を中心に各地の運動資料の所在調査や、WEBサイト「記録で見る大気汚染と裁判」(環境再生保全機構)を作成したりなど、いろいろ呼びかけていきました。

そんな中、2013年に環境省の協働取組のモデル事業が公募され、これを機に公害資料館ネットワークをつくらうと呼びかけて、ネットワークをつくり8年目になりました。

毎年1回、フォーラムを開催して、皆が集まって学ぶということずっと続けてきました。行くときよくわかるんですが、自分のところ以外、他の地域の公害がどうなっているかわくわからなかったですね。集まって学んで、衝撃を受けるということを皆が経験して、考えていききっかけ、場をつくっていくことを続けてきました。

今年は、残念ながら開催できなかったのですが、プレ企画という形で、公害資料館ネットワークの共通展示パネルの展示を長崎でさせていただくことになりました。



林 美帆さん  
(公益財団法人 公害地域再生センター  
(あおぞら財団) 研究員、  
公害資料館ネットワーク幹事)



大串 秀人さん  
(ナガサキピース  
ミュージアム理事)



## クロストーク ナガサキピースミュージアム × 公害資料館

### ナガサキピースミュージアムを訪れて

(林) 常設展がないということに、びっくりしました。全くないわけではなく、少しはありますが。それから「あ、平和なんだ、そういう切り口なんだ」と改めて思いました。「ナガサキピースミュージアム」だから「ピース」なんですけど、訪れて納得しました。展示を月1回入れ替えて、いろいろなことを学べる場をつくり、話し合えるようにされている。語り合えるような場が必要なんだと重要視されていることに感銘を受けました。

平和を目指して芸術ができることがあるということで、モニュメントを見せていただいて「ああ！」って思ったんですが、平和を実現するっていうことは、戦争がないことだけではなくて、公害も同じであって、そういう部分で言えば、SDGsという概念を使えばつながっていくんだろうなというのをしみじみと感じていました。

公害反対運動で「戦争こそ最大の公害である」とスローガンがよく使われるんですけど、本当にそこなんだと、私は感じました。

(大串) そうですね。うちの場合は、反戦・反核とか、あまり難しい政治的なことはあまり押し出してないんで、身近な誰でも共感できるようなところから、そういう平和を考えていただく場を提供しようという形でやっております。なので、すごく緩い平和だろうと思います。

### 公害資料館パネルを見て

(大串) 7枚によく集約されているなと思いますね。公害の背景であるとか、被害者の方々の活動、対応など流れがわかって、その上で、それぞれの公害資料館へのアプローチと

共通パネルは、個別の公害ではなく公害に共通するものは何かを2016～2018年にかけて議論をして作成しました。7枚で構成されていて、「なぜ今、公害から私たちは学ぶのでしょうか」からはじまり、「なぜ公害は生じたの」と続きます。公害は、戦争が非常に大きく影響しています。戦後復興が推進されるなかで公害が発生し、公害被害者が生まれる。

しかし被害者の声が届かない、そうした声をどう届けるか、支援者や司法への訴え、そして救済制度が作られる。しかし、制度から漏れてしまう人たちがいる問題、そういったことが書かれています。

また、公害が発生しないための環境アセスメントや、SDGs。「誰も取り残さない」ということが、被害者の声を取り残さないということにつながることで、そして各地にいろいろな公害資料館があることを説明しています。

戦争の被害があり、そこからの復興を推し進めていく。こうしたベースが各地にあることに、パネルを作るための議論の中で気がついていきました。戦争ということと、公害というのは切り離せない問題ですね。議論し、作成していくことは、とても大事だったと感じています。

意外にも、作成した後は、すんなり受け入れられました。作るまでは、喧々諤々、館として、各地の公害地域として伝えたいことがいろいろあって大変でした。ただ、違うことはいろいろあるけれども、それでも未来に向かって共通点というものはある。だから一緒に考えていこうとなっていたのではないのでしょうか。SDGs へもつながりやすかったのではないかと思います。

共通点を探し、整理したことで「あ！なるほど、自分たちの公害の背景には、こういうふうなことがあったんだな」ということが理解しやすくなって、ちょっとした道標になったとしたらうれしいことです。

して良いんじゃないかなって思います。

SDGs は、パートナーシップであるとか、誰一人取り残さないというスローガンで記憶されますが、目標の中身は、健康と福祉とか、海や陸の豊かさ、つくる責任・つかう責任など、いろんな分野があって、それと各地の公害をあてはめてみると、たくさんあてはまる場所があると思うんですね。そういったところを、今後ずっと貴重な経験をどうあてはまるかを議論していけば、SDGs の精神にもつながるのではないかなと思います。公害資料館も、各地の経験の継承と同時に、将来の SDGs の発信の場になってもらえればいいんじゃないかなと思います。

### 参加者とのクロストーク

はじめに、五十嵐実さん(日本自然環境専門学校)の「被害にあった方が亡くなっていく状況で、どのように伝えていくか。長崎での戦争・原爆に対する捉え方はどうなっているのでしょうか」という問いかけに、大串さんからは、語り部が減っていることへの危機感があり、映像でアーカイブとして残す活動や、朗読会や紙芝居で伝えていく活動、「平和案内人」を市民から募って研修をして、案内・説明できる人材を養成する活動など紹介がありました。また、長崎出身の参加者や、長崎大学の学生から自身が受けた平和学習についてお話しいただきました。司会の友澤さんからは、長崎の地元のニュースや新聞の紙面を見ていると、戦争・原爆を取り上げる機会は、首都圏に比べればまだはるかに多く保たれており、心強く感じているとのお話がありました。

林浩二さん(千葉県立中央博物館)からは、現代美術家の宮島達男さんが取り組んでいる「時の蘇生・柿の木プロジェクト」に関して、被爆柿の木2世の植樹に関わる方々の中では原爆だけでなく、普遍的な平和が語られていることの紹介があり、植物のもつ強靱な生命力は、様々な教育の場で生かせるのではないかと、「当事者語り部だけが語り続けられるわけではない」ことに対応する仕組みを、我々はうまくつくっていかなく

ばならないのではないかと提案がありました。

水俣の森山亜矢子さん(環不知火プランニング)からは、ドイツとポーランドの関係性をふまえ、日本はどうか？水俣でも小学生に政治的なことはどうかといった話もあるが、「子どもの成長過程に合わせて平和や公害をどう伝えるか、そのあたりどのように思われているか」という問いかけもありました。

「NPO法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」を立ち上げ活動されている栗原淑江さんからは、「公害と原爆とのつながり、その根本のところには戦争があるというご指摘に共感し、やはり公害も原爆も、戦後社会のこの日本の社会のあり方を根本から問い質している問題だろう」という発言とともに、「公害・原爆ともに今ある制度の根本に、国や企業の責任が本当に位置づけられているか疑問である。これから私たちはどうしていかなければいけないかを一緒に考えていかなければならないと思っています」とコメントをいただきました。

一方で、高木勲寛さん(神通川流域カドミウム被害団体連絡協議会)からは、戦争と公害のつながりはもちろんあるけれども、公害資料館ネットワーク、連携フォーラムで扱うことについての懸念が語られました。政治的に利用されないよう、公害資料館ネットワークとしては、しっかりと公害を伝えていくこと。その中には戦争とのつながりもあったということではないだろうか。また、イタイイタイ病に関して、語り部が少なくなっていることや、対象にあわせてどこまで話していくかなど取り組んでいるが、他地域の事例を知り、学んでいきたいとの発言がありました。

他にも、金鏡仁さんからは、「韓国を含め、他の諸国との連帯活動をも願いたい。韓国にもナガサキピースミュージアムや公害資料館のことを伝えていきたい。各地の公害資料館のWEBサイトに韓国語の説明もあり、わかりやすい。ずいぶん前からありがたいなと思っていた。」とのコメントがありました。イタイイタイ病の資料館ではロシア語を含め5か国語で発信していることや、海外の公害資料館の把握まではできていないことなど、林美帆さんから説明がありました。



### コメント

**高田 研さん**（公害資料館ネットワーク代表幹事、都留文科大学特任教授）

大学生をたくさん連れて、2018年に新潟で聞き書きの調査をさせていただきました。次の世代に公害の問題を考えてもらうということで、非常に大きな成果を得ました。

今年になって、聞き書きをさせていただいたお二人が他界されました。もう聞けなくなってしまう、貴重な我々の財産になったのではないかと思います。

同年に文科省のドイツとの青少年の交流事業で25人ほどの大学生を連れて行きました。ベルリンの郊外にある非常に綺麗なユースホステルで議論したのですが、かつてこの場所は女性専用のユダヤ人収容所の官舎だった場所でした。その横に収容所も保存されており、ここで民主主義のあり方を議論しました。ドイツが戦争に突き進んだ原点に、民主主義がどんどん失われていったというプロセスがある。ここを若者たちに学ばせなければという強いドイツ側の思いがありました。しかし、残念ながら日本の大学生からは民主主義というキーワードではなかなか言葉が出てこない。そういう経験を2週間ばかりさせていただきました。

考えてみると、現象面は公害や自然破壊の問題ですが、公害教育は私たちが何をきちんと考え政治的に発言していくか、という教育をすることではないでしょうか。SDGsの17番目の目標（パートナーシップで目標を達成しよう）は、市民がどう連携して、それをやっていくのかに最終的につながっていくのではないかと考えています。

来年、長崎でフォーラムを開催できることを、本当に心待ちにしています。



### 閉会あいさつ

**下田 守さん**（公害資料館連携フォーラム in 長崎実行委員、下関市立大学名誉教授）

なぜ公害資料館ネットワークのフォーラムを長崎で開催するのかと違和感をお持ちの方がいるかもしれません。私は主にカネミ油症について調べてきました。油症の被害者は長崎県に多いですが、長崎だけでなく福岡など西日本を中心に各地にいます。

長崎といえば原爆・平和がまず浮かび、公害とは違うと受け取られやすいですが、原爆症は人間についての健康被害として四大公害などの公害と共通する面があると思います。水俣病、油症、原爆症などの大規模健康被害は、いずれも非常に長期にわたる難病であり、各段階で未知の経験であることが多く、診断も治療も難しく、認定や差別などいろいろな問題が出てきます。このように公害と原爆症にはいろいろな共通する面があり、薬害その他の大規模健康被害とのつながりも出てくるのではないかと思います。

長崎は日本の中でとてもユニークな所だと思います。簡単に言うと、歴史と空間が交わる場所です。地理的にも世界と日本、歴史的にも過去と現在をつなぐ所と言えるでしょう。さまざまな人や物、考えがここに来てぶつかり、ここを経由してどこかに行く。そのまま通り過ぎるだけでなく、そこで何らかの反応が生まれる。要するに、異質なものに触れ、新しい気づきができ、またよそにいく、そういう所ではないかと思います。

今回のパネル展のタイトル「影、光る」は、今まで気づけなかったことに光を当てるという意味も含むと思います。公害から原爆などに、あるいは原爆や平和から公害に、今まで気づけなかったことに光を当てていく。そこで何か起これば新たな光を灯す、そんなきっかけになればと思います。

今日のトークのようにいろいろなテーマがぶつかるというところが一番面白いと実感しています。ぜひ来年に向けての議論にご参加いただければと思います。

### 〔参加者の感想〕 アンケートから一部抜粋して紹介します。

公害と戦争はつながっているという指摘。以前、公害患者会の方がそのように話されるのを伺って以来、強く心に残っています。


長崎で次回フォーラムが開かれることの意味がだんだん分かってきて、非常に楽しみになりました。

公害は高度成長の影として語られることが多いが、実は戦争以前からあったということ、敗戦後の復興ともつながって起きたものであるという歴史的な解釈。

また、国は、国内で戦争の被害を受けた市民（空襲被害者など）に受忍を押し付けてきましたが、国や企業の責任という点において、公害も戦争も戦後社会の在り方を問いただしているという視点にはっとさせられました。

当日の様子は、公害資料館ネットワークのYouTubeチャンネルで一部公開しています。ぜひご覧ください。

<https://www.youtube.com/channel/UCOmbwU2iYUFM7kPZy8zwp1Q>



## パネル展示「影、光る — 全国公害資料館からのメッセージ — 」

期間：2020年12月1日(火)～12月25日(金)

ナガサキピースミュージアムを会場に、公害資料館共通パネル7枚をはじめ、各地の公害資料館の紹介パネルを計21枚展示しました。パネルのほかにカネミ油症事件など、九州の公害に関する書籍10冊も展示しました。期間中には115名の方が訪れました。

#### ◆長崎実行委員の書棚から“九州×公害”を知る本

- 〈カネミ油症〉カネミ油症事件50年記念誌編さん会議『カネミ油症事件50年記念誌』五島市、2020
- 〈カネミ油症〉『河野裕昭写真報告 カネミ油症』西日本新聞社、1976
- 〈カネミ油症〉矢野トヨコ追悼文集刊行会『矢野トヨコかく生きたり — あるカネミ油症被害者の歩み』アットワークス、2010
- 〈対馬イタイタイ病〉西木暉『対馬への旅 — 罪なきこととけして言うまじ』合同フォレスト、2016
- 〈水俣病、じん肺等の訴訟に関わった弁護士〉阪口由美『たたい続けるということ — 馬奈木昭雄聞き書き』西日本新聞社、2012
- 〈豊前火力発電所建設反対運動〉松下竜一『暗闇に耐える思想 — 松下竜一講演録』花乱社、2012
- 〈「蜂の巣城」をつくって下釜ダム建設に反対した室原知幸の評伝〉松下竜一『砦に拠る』筑摩書房、1977
- 〈水俣病〉塩田武史『僕が写した愛しい水俣』岩波書店、2008
- 〈宮崎県・土呂久ヒ素公害〉川原一之『土呂久羅漢』影書房、1994
- 〈九州の住民運動〉村田久遺稿集編集委員会編『響きあう運動づくりを — 村田久遺稿集』海鳥社、2014

